

オマーン・マスカット素描 小野塚 透

深夜の暗闇に、明るく浮かぶ街が現れた。首都マスカットである。飛行機の窓に顔をこすり付けながら私は「いよいよ来た」と自分に言い聞かせた。日本から飛行機で15時間はかかっただろうか？見果てぬ国、オマーン。オマーンといえば日本人であれば、サッカーの強いアラブの国としか思い浮かばないかも知れない。しかし、原油と自動車等では古くから日本と深い結びつきがある。オマーンはアラビアンナイト（千夜一夜物語）の国であり、かつて、アフリカ人奴隷と乳香で巨万の富を築き、栄えた国でもある。その後、ポルトガル植民地や鎖国の時代を経て、1970年代にカブース国王の下、原油を元手に美しいイスラムの国を作り上げた。

車で街をしばらく走ると、道は綺麗に舗装されていて、照明灯が日本の二倍くらいあり、各所で建物やモニュメントをライトアップした風景が続く。美しい絵画の世界である。これに私は抵抗を感じた。書物の中のオマーンしか知らないために、開発途上国の位置づけでイメージしており、これほど緑の多い進んだ国と思っていなかったからである。「JICAといえば開発途上国のはず、どうしてここに日本の援助が必要なんだ？」と、頭の中で現状把握に努めた。

一夜明けて外に出てみるとその考えがますます強くなった。外に広がる風景はサイパンやグアムを思わせるリゾート地である。家々の白壁に油ヤシの木が木陰を作り、蝉時雨が青空に染み渡る。行き交う人々に憎悪の表情はない。ここ9年間殺人事件等は一切起きていないというが、ここに来ると納得してしまう。海岸に出ると波の



写真：マスカットの外観 2005年

穏やかな砂浜にはゴミがなく、海鳥と人が交互に点在している。ときどき子供のハシャギ声が聞こえて、「平和とはこういうものか。」と思わず自分に問いかけてしまう。「こんな平和な国を創ったオマーン人とはいったいどういう人たちであろうか？」と素朴な疑問が湧いてきた。しかし、その答えを出すのにさほど時間はかからなかった。職場である水産物品質管理センターですぐに業務が始まったからである。





写真：サラサのモニュメント 2006年

頭にちょっと気取ったバンダナのようなものを巻いた白いワンピースの男性たちと、質素な感じの黒いワンピースで顔に黒いスカーフを巻いた女性たちは、最初だけ対照的に見えた。話をしてみると男女とも非常にフレンドリーで笑顔が素晴らしい人たちであった。「きっとはじめだけだな」と勘ぐっていたが、2日たち、1週間たち、あっという間に三ヶ月がたち、驚いたことにその間中、笑顔が絶えなかった。そして、仲のよくなったオマーン人から何回となく訪問を受けて、その度ごとに「今度は貴方が私の家に来る番だよ」と招きを受けた。

断りきれなくなった私は、妻子を連れて、あるオマーン人のお宅へ出かけた。マスカット郊外の小さな集落で、岩山に囲まれたくぼ地にその家があった。近くには昔からのオアシスがあり、岩山から湧き出しているという。その家に入るとペルシャ絨緞が敷き詰められており、乳香でむせ返るほどであった。イスラムの習慣で妻と娘は別室に向かい、私だけ応接間に招かれた。歓迎の意味合いで焚かれた乳香はなじみがなく、悪い匂いでないが、どうしても葬儀を思い出してしまう。アラビックコーヒーを飲み、世間話が尽きたころ、大量の食事が運ばれてきた。これを恐れて私たち家族は夕食を自宅でとってきたのが逆効果になってしまった。大皿に山盛りのフルーツ類、マンゴ、パパイヤ、リンゴ、バナナ、パイナップル、イチゴ、葡萄(勿論、マスカット)。それも客が手を出さないとその家の人たちも手を出せない状況で、仕方なく全一

個ずつ口に運んだ。それが終わるとピラフ、鶏肉のフライ、サラダ、カシューナッツ、ナッツソース(オリーブオイルを使ったピーナッツペースト)、串焼肉、ナン等々…。いろいろあったので思い出せない。食べつくしてホッとすると、またまた大きなお盆にケーキ、クッキー、ポテトチップス、チョコレートボール、ジュースが出てきた。イスラム教なので酒や豚肉は一切ないものの、食べなくなるまで食べ物を出すのが流儀らしい。私の出っ張ったお腹ははちきれんばかりとなった。一通りの挨拶を終えてその家を後にすると3時間以上たっていた。帰りの車の中で妻と交わした会話は少なく、「明日の朝飯はいらないよ」と私が言うと、妻も苦しそうにゲップをしながら「うん、あたしも」と変な答えを返した。

そんな事があってから現地の人とのかかわりが徐々に増えていった。それと共に悩み事の相談やお祝い事



写真：ホテルでのもてなしの様子 2006年



写真：職場の同僚とドリヤニを食べる 2005年

の招待も受けるようになった。ある日、職場の個室で、冗談交じりに刺身を勉強するために日本食レストランへ行こうという話をしていた。そこにアフリカ系のスタッフが入ってきた。職場の同僚なので「君もいっしょに行かないか？」と気軽に私が言うと、今まで冗談話で笑っていたアラビア系スタッフがムツとして、「彼とはいっしょに行きたくない。もし、彼が行くのであれば私はいかない」とそのアフリカ系スタッフの目の前で私に話した。私は啞然として、どうフォローしたらよいのかわからず、息を呑んだ。アフリカ系スタッフは苦笑いしながら、両手を胸の前で広げ、「お好きなように」のポーズをとった。私は自分の勉強不足を悔いた。後で、他のメンバーに差別や家族制度についていろいろ教えてもらった。地方派閥、家族名派閥、人種派閥等に出世も深く関係しており、結婚までもが制限されている。日本でも同じような問題はあがるが、オマーンではアラビア系、パキスタン系、アフリカ系等に地域、部族、ベドウィン等が複雑に絡み合い、差別意識が強い。当然、職場の業務にも派閥が強く影響していて、個々のアイディアなどは無視されてしまい、トップダウンで物事が決められてゆく。これだけ人間関係が複雑だと、トップダウン方式の方が無難な感じさえある。また、その反動で向上心が損なわれていることも事実である。

外国人に対してフレンドリーな反面、オマーン人同士の差別意識が強く、技術の進歩を遅らせているように思える。ここに機材が投入された場合、間違いなく特定の担当者のみが技術を習得して、その後の人事異動や退社の際は引継ぎを拒むであろう。そこには部族や人種等の軋轢があり、派閥があるからだ。赴任して間もない日、微生物の検査を行っている際に、消毒用のアルコールを実験テーブルに吹き付けた。なかなか蒸発しないので手に塗り、アルコールの有無を確認した。やはり、ほとんど水である。新人がアルコールを作ったために調合を間違っただけなのに、基本的な問題なので、いつも検査をしている人なら一回使えばすぐにおかしいと思うはず。しかし、それを全員が2ヶ月間以上使い続けるのは、基礎ができていない証拠である。経済発展を急速に行い、見た目に



写真：職場の様子 2006年

は進歩した国に見えるが、実は基礎的な技術が遅れていて、本当の意味での技術力が十分ではないのである。

オマーンで技術協力の仕事を遂行する意欲をまだ失ってはいない。それは、周りにいるオマーン人がそれぞれ良さをもっているし、争いごとを嫌い、明るく冗談好きでやさしいからだ。何より自分が間違っただけには素直に「ごめんなさい」と謝るオマーン人が私は大好きだ。

(小野塚 透：2005年2月から2007年2月まで、オマーン国の水産物品質管理センターで水産品質管理分野の技術協力活動に従事)

“アールディーアイ通信 No.33/2008”から